廃園の牢獄―女神の玉座２―

天海りく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
廃園の牢獄―女神の玉座２―

【Ｎコード】
Ｎ８９７５Ｙ

【作者名】
天海りく

【あらすじ】
黒羽と漓瑞は第九支局のあるタナトム国の聖地へと向かった。聖地である廃墟には侵入者の痕跡がありそれを探ることになる。そして黒羽は学者という青年を見つけるがその素性も性格も面倒なものだった。さらにふたりが訪れた直後に起こった強盗殺人事件まで絡んできて事態は混迷していく。――女神の玉座第二章。

1

長方形の石を敷き詰めて作られた暗く湿った壁が松明の灯に照らされぬめった光沢を放つ。そこに長く伸びる人影が揺らめいた。
息を詰めながら粗末な布の袋を背負うふたりの男が裸足で苔むしぬるつく石畳の床をひたひたと音をたてながら奥へと進んでいく。
「おい、おかしくないか」
ぴちゃんと天井から落ちた水滴が撥ねて、ひとりが声を強張らせる。
「いつもより水が多いな。ああ、くそ」
天井から滴り落ちてくる水滴に灯が消えて辺りは闇に包まれた。
「見えるか」
「……いつもの道だ。間違えることはねえだろ」
男達は右手側の壁に手を当て、深い闇の中を記憶だけを頼りに進んでいく。奥へ、奥へとただひたすらに。
しかしいつまで経っても記憶にある曲がり角にさしかかることがなく、彼らは足を止めた。おかしい、と思って引き返そうとした男の素足にひんやりとした細長い何かが触れる。
「ひい、蛇だ！」
ひとりの男が悲鳴を上げて駈け出そうとするが足をもつれさせて転んだ。そして投げ出された荷物がじゃらりと音を立てる。
「馬鹿野郎！　落とすんじゃねえ！　だいたいこんなところに蛇なんかいやしねえよ」
怒鳴りつけた男は言いながらひゅっと息を呑む。
「おい、どうしたんだよ」
よろよろと立ち上がったもうひとりの男が急に黙りこくった相棒に不安になり声を震わせた。
「……女の声がする」
息を潜めていた男がつぶやく。

「なに、馬鹿なこと……」
言ってるんだと続けようとしたもうひとりの男が耳に届いた声にがたがたと歯を鳴らす。
寂しかったわ、と告げる女の声は艶めいていながら男達の心臓を恐怖に凍り付かせる。それは本能的な恐怖だった。畏怖、というべきかもしれない。
「くそ、出るぞ」
竦む足をどうにか動かして男達は駈け出す。
だが何かにぶつかった。くしゃっとした湿った青臭いそれは何かの蔦のようだった。なんなんだと焦燥の声を男達は上げようとする。
だが、闇の中響き渡ったのは彼らの救いを求める悲鳴だった。

1

かつて世界の瘴気を浄化した女神が深い眠りついた後にその役割を継ぎ、瘴気から産まれる妖魔を滅し女神の眷属であった魔族を管理する人々が集う組織。それが人外監理局だ。

女神がいた頃に環の形をしていたが今はふたつに割れてしまった大陸の間、ちょうど世界の中央に浮かぶ女神の島。そこにある四本の樹が絡みつき巨木のような姿をした天高くそびえたつ塔がその本局である。

その内部は外観からは想像がつかないほどの数多の部屋と広い空間を持っている。

「塔の中に庭って不思議だよなあ」

白い花が咲きこぼれる円形の庭園で長椅子に座り空を見上げてそうぼやくのは背の半ばまである灰色の髪を一つに結んだ涼しげな面立ちが麗しい細身の青年だった。帯刀しているその人物が凛としながらもどこか人懐こい青みがかった灰色の瞳を向かい合わせになっている椅子に座る女の子達に向ける。

監理局員である証の銀の硬貨のような耳飾りを片耳につけている以外は肌の色や髪、瞳の色、それに纏う衣装すらばらばらな世界の各地から集められた十代半ばから二十代前半ぐらいの彼女子達が青年の視線に頬を染めため息をつく。

「ええ。私も最初来た時はびっくりしましたの。この他にも庭はたくさんあるからご案内しますわ」

金髪の少女がそういえば。

「まだ来て三年のくせに何言ってるの。それなら八年いる私のほうが詳しいわ。今度私が案内してあげるわよ」

赤毛の二十代とおぼしき女性が対抗し。

「ちょっと、あなた婚約中なのにいいの」

黒髪の少女が茶々をいれる。

「いいのよ。黒羽（くろば）は女の子だから浮気じゃないもの」
赤毛の女性がそう言うと女の子達は一斉に美青年、もとい一応は十七歳という年頃の少女である黒羽を見て物憂げなため息をつく。
「ああ。本当に信じられない。こんなに素敵な男性が女の子だなんて」
その場にいる最年少の褐色の肌の少女の嘆きに黒羽が苦笑する。
子供の頃から初対面で女だと気づいてもらえず成長してからは背丈も周りの大人の男達と変わらないぐらいまで伸びてことさら男と間違われるのでもう慣れてはいるが、落胆されると困ってしまう。
つい一月前に北大陸東部にある玉陽国にある東部第一支局からこの本局に来たわけだが、どこにいても女の子達の反応は一緒だ。
「まあ、男にはなれねえけど、話し相手ぐらいにはなるよ。本局って広すぎてどこに何があるかもまで全然わかんねえし、教えてくれたら助かる。そろそろ出張の辞令が出るから帰ってきてからになるけどな」
微笑みかけると女の子達がもちろんと幸せそうにうなずく。
この反応は未だに意味不明だがとりあえずよくしてもらっているし、みんな楽しそうだからいいかと黒羽は深く考えることはやめた。
「ご歓談中の所をすみません。黒羽さんをお借りしてよろしいですか？」
そこへ性別を感じさせない耳心地のよい声がするりと滑り込んでくる。
声の主は十四、五の少年だった。さらりとした黒髪とどこか作り物めいた精巧な愛らしさを持つ面立ちの彼、漓瑞（りすい）に視線をやった後に黒羽は女の子達に了承を取って立ち上がる。
「じゃあ。また今度な。今日はかまってくれてありがとう」
そしていつでも声かけてねと手を振る少女達に別れを告げて黒羽は漓瑞と並んで歩く。
「遅かったな」
そう言いながら黒羽は自分の鼻先ぐらいの位置にある漓瑞の瞳を

見下ろす。
　この庭にいたのは漓瑞と待ち合わせをしていたからだ。鍛錬を終えてひとりで長椅子に座っているといつの間にか女の子達が集まってきて賑やかになった。
「ええ、少し待ち時間が長くて」
　漓瑞が魔族の証である刻印が刻まれた左手で肩口の髪を払うような仕草をしながら答えて苦笑する。
「いけませんね。さすがに五十年近くあの長さだと急には切り替えられませんね」
「そりゃ、十年一緒だったあたしがまだ慣れないんだからそうだろ」
　自分が馴染み深い漓瑞は可憐な少女の姿だ。今でも彼を探すときに長い黒髪の少女をまず目にとめてしまう。
「慣れませんか」
　小さく漓瑞が笑う。昔より、少し明るくなった気がするこの笑顔はいい変化だと思った。
「まあ、しばらくすりゃ慣れるだろ。どうせずっと一緒にいるんだしな」
　なにげなく黒羽がそんなことを口にすると漓瑞が目を瞬かせた。
「ずっと、ですか」
「……別に親離れしないって言ってるわけじゃねえぞ。いつでも会いたいときに会いに来るからずっとだ」
　いつまでも子供の頃のようにべったり漓瑞に甘えるわけじゃない。ただお互い会いたいときにあえるのなら一緒にいると変わらないことだ。
「ああ、そういうことではなくて、いまだに実感がわかないだけです。いまもこうしてあなたと一緒にいられるだなんて思ってもいなかったので」
　そういう漓瑞の瞳に影が差して黒羽は口を引き結ぶ。
　漓瑞は現在北大陸の三分の二を支配下に置くレイザス帝国に侵略された玉陽国の皇家の唯一の生き残りであり祖国を奪い返すために

反乱を起こした。そのさい監理局を離叛した彼は確かに死を覚悟していた。
そのときの影が垣間見えた気がして黒羽の胸がざわついた。
「……柳沙(りゅうさ)の奴、元気そうなのか」
話題をそらすと漓瑞がうなずく。
「生活の方も不自由はなく、まだ独立から間もないですが、確かに希望は見えていると書いてありました。……検閲はされているのでいいことしか書けないでしょうが、支局の方達なら本当によくしてくださっているでしょう」
幼いうちに亡くなった母の代わりになってくれていた女性の事を語る漓瑞の目が細められる。
そして柳沙は反乱の時身を潜めていた漓瑞の代わりに表で彼の命令を反乱軍に伝え指揮していた。
彼女は乳児誘拐に荷担していて投獄はされなかったものの玉陽で監視付きの生活を送っている。漓瑞もこうして自由に歩き回っているがそれは本局内だけで許可なく本局から出ることは出来ず玉陽に出向く事は禁じられている。
そういった事情でふたりの手紙のやりとりは原則監理局の監視下で行われていて今日、漓瑞は監視付きで柳沙の手紙を受け、その返事を書いていたのだ。
「あたしからもあいつのことはよく頼んであるしな。大丈夫だろう」
黒羽にとっても柳沙は幼い頃に面倒を見てくれた人で、彼女が穏やかに暮らせていることを願っている。罪は消えはしないが、彼女ならきちんと向き合えるだろう。
「手紙、黒羽さんも書いたらどうですか？」
「いいよ。苦手だからな、そういうの。元気にやってるならそれでいいや。それにあたしの字は汚ねえからな」
茶化すように言うと漓瑞の表情に明るさが戻った。
「あなたの悪筆は読めないときは本当に読めないですからね」
「自分でも読めねえからな。書き直せっていわれると困るんだよな

あ」
物覚えも悪いから自分で何を書いたかも覚えていないのでよく係長に呆れ混じりに怒られたものだ。
そんなことを思い出すと急に、無性にあの退屈な日々が懐かしくなる。
瘴気が凝って出来た巨大な力を有する妖刀、冥炎（めいえん）の使い手であるがためにさっさと室長に昇進させられ書類の処理にばかり追われていた支局の頃より、ひたすら本局の実力者達と剣の鍛錬をしている方が毎日が充実しているがやはりあの場所が好きだ。
まだ一月しかたっていないのにやけに支局での日々は遠く思えた。
玉陽で反乱が起こってからは捨て子だと思っていた自分が人為的に創られた存在であると知らされ、ずっと自分の成長を見守っていくれていた漓瑞は監理局を離叛するし、十年来の親友の藍李（らんり）も実は東部総局長でといろいろありすぎた。
自分の年齢すら間違っていたのだ。捨て子で正確な年齢が分からず大きかったので二つほど上に思われていてそれを自分も信じていた。これまで生きてきた全てがあの短い間に全てひっくり返ってしまった。
それでもあの場所で過ごした思い出や覚えた感情は変わらず愛しいものであることは変わらない。
「……全部片がついたら向こうに帰れるかな」
できれば何もかも終わったらあの場所で教務部に移動して子供達の相手をしていたい。
黒羽がそんな願望をこめたものをつい口に出してしまうと漓瑞が柔らかく微笑んだ。
「藍李さんだってさすがに無理に引き止めたりはしないでしょう。おそらく」
「まあ、そうだな。とにかくやることやんねえとな。アデルの野郎出てくるかな」
現本局長でもある西部総局長の実兄アデル・オルフェ。

多くの赤子を犠牲にし妖刀と波長の合う高い霊力を持たせた神子（みこ）呼ばれる黒羽を含む七人の特異な人間を創り出した男。
九年前に一度死んだはずのアデルは黒羽と同じ神子の緑笙（ろくしょう）という十三の少年に肉体を乗り換え、かつて女神の存在した時代へと世界を巻き戻すという狂言を実行しようと聖地に踏み入り世界の均衡を崩そうとしている。それを止めるべく、そして緑笙を取り戻すべく黒羽はここにいるのだ。
「そう簡単にあの方が捕まるとは思いませんが……本局長もいますし」
「藍李が本局長からなんか聞き出せりゃいいんだけどな」
今、藍李は月に一度の宗家会合に出ている。
そこに当然アデルに協力しているその弟であるランバートも出席していてこれからまた問い詰めると藍李は意気込んでいたが、どうなることか。
「いい報告を聞けるといいですね」
漓瑞はさして期待してはいなさそうな口ぶりだった。
「あの本局長もよくわかんねえよな。本当に」
悪い人間には見えないのが余計に戸惑う。
ぐるぐると考え始めた黒羽だったが、すぐに性に合わないと思考を放棄してしまった。

2

宗家会合。文字通り女神より瘴気を浄化する神剣を与えられ監理局を創設し代々共同で監理局の長として立つ四家による会合である。

東部総局長として出席する藍李は神剣九龍を背負い複雑に交差する廊下を迷いなく進む。　その途中、今日はいつもよりまとまりの悪い癖のあるふわりとした赤毛を指に絡めていると、後ろ姿でも十分に分かるぐらいにがちがちになっている少年を見つけた。

「どうしたの。お父様はお加減が悪いのかしら？」

声をかけると少年が足を止めて振り返る。

「ああ、どうも。藍李様、お久しぶりです。父は会合に出席できないわけではないのですが自分ももう十五なので」

緊張しきった面持ちでそう言う褐色の肌と黒髪の生真面目な少年は次期南部総局長となるハイダルだ。その腰には二本の刀身の短い半月刀、神剣シトゥームがちゃんとある。

十五ということは成人したということである。そう遠くないうちに総局長となる彼に少しずつ職務になれさせるつもりだろう。藍李自身もその年頃から何度か出ていて、母である前東部総局長が出席できなくなったここ二年ほどは毎月出席していた。

「そうなの。それならよかったわ。あら、背、伸びたわね」

横に並んで半年前に自分より少し低いぐらいだったのに追い越されているのに気づいて藍李が顔を綻ばす。

彼女の鮮やかな色の花が咲きこぼれたかのような美しい笑顔に少し頬を染めてハイダルがうなずいた。

「ええ。もっと伸びるといいんですが……」

十五でやっと平均的な女性の身長である藍李を追い越したハイダルは背が低いのが悩みどころらしい。

「きっとまだまだ伸びるわよ。お父様だって大きいし」

「だといいですが。あ！　遅くなりましたがご婚約おめでとうございます」
藍李はハイダルの言っている意味が分からずに彼の純朴そうな黒真珠に似た瞳をきょとんと見る。
そしてようやく心当たりに思いついて吹き出した。
「違うわよ！　噂の私の婚約者は例の神子の黒羽よ」
支局から黒羽をつれて戻ったときにそんな噂がたってしまったのだ。一月経って誤解は解け始めているもののまだ勘違いしている人間もいるらしい。
「え、じゃあ。あの人は女性……も、申し訳ありません。相手の方にもなんて失礼な」
顔を真っ赤にしてうろたえるハイダルに藍李は大笑いしてしまうのをこらえようと口元に手を当てて震える。
「黒羽が男に間違われるのはいつものことだし、本人も気にしてないからいいわよ。黒羽のこと、見かけたの？」
「はい。女性局員が周りに集まっていたのと遠目だったので……」
通りすがりに見かけただけで名前は聞けずにただ藍李の婚約者ということだけ小耳に挟んだらしい。
あの容姿で婚約者と聞かされれば勘違いしない方がおかしいだろう。
「今度紹介するわ。たぶん直接話しても女の子って気づきにくいと思うわよ。声もちょうどハイダルぐらいの男の子っぽいし。それよりまずは、初めての宗主会合ね。そんなに緊張しなくて大丈夫よ。いるのは私の他に根暗と酔っ払いなんだから」
宗主会合の行われる部屋の前に立って藍李が片眼をつぶってみせる。
少しは肩の力が抜けているもののハイダルの表情はまだ硬く、藍李はそれに苦笑しつつもほほえましく思いながら扉を開ける。
「お、坊やじゃねえか。親父さんはどうしたんだ？」
入るなり声をかけてきたのは白金の髪と紫がかった青い瞳の軽薄

そうな男、北部総局ブルト家当主のオレグだった。
藍李にしたのと同じ説明してハイダルが律儀に頭を垂れる。
「そ、そういうことなので未熟者ですが今日はよろしくおねがいします！」
そして顔を上げたハイダルが見つめる先では金糸の髪と青い瞳の眼鏡をかけた美麗な青年、各家持ち回りの本局長を勤める西部総局長オルフェ家当主ランバートがはいと小さく答える。
いつもながら陰気だとうつむき気味のランバートを見ながら藍李は九龍を背から外し、真白い石の円卓に設けられた彼の真向かいの席に座った。
「今日は俺が一番年上か。若い連中に囲まれると一気に老けた気分になってやんなるぜ。まっ、美人は若い方がいいけどな」
この場で最年長である二十八歳のオレグが二十歳の藍李を見ながら口角を上げる。
「……始めて、いいだろうか」
二十二歳のランバートが遠慮がちに問うのにオレグが肩をすくめてどうぞ、と答えた。
「西部局管轄区内において目立った異常はないが、レイザス帝国の新皇帝が即位したことで今後情勢が著しく変動することと思われるので注意したいと思っている。必要に応じては支局への妖刀及び魔剣の配布数を増やす、あるいは本局より使い手を派遣することを考慮したい。次、北部総局長どうぞ」
「……北部局管轄区も目立った異常はなし、だがレイザスとの国境付近はちょっときな臭えかもな。先月より妖魔の出現数が増えてるが、誤差の範囲内だからなんともいえない。帝国次第ってとこだろうな。あとは冬が来たらどうなるか、か。はい、次坊や」
「は、はい。南部局管轄区は今夏ファルーヤ王国からジギダル砂漠にかけて降雨量が少なく食糧と水に影響が出ています。すでに瘴気の溜まり場が出来ている場所もあり警戒を強めています。それとサンジタヤの部族抗争が激化しておりそちらのほうでも妖魔が多発し

ています。以上の地区を担当する南部第二支局、第五支局、第六支局、それとえと、第九支局にひとりずつ妖刀及び魔剣の使い手を派遣しています。第二支局に関しては増員を検討中です。……あ、すいません以上です。東部総局長どうぞ」

「東部局管轄区では玉陽国の反乱の影響が出ています。第一支局での妖魔の駆逐に現状では不足はありませんが以後の状況を見て妖刀及び魔剣、或いは分家に応援にあたってもらうことを考えています。玉陽国の第一皇子の身柄は引き続き九龍家で預からせていただきます。同様に神子の黒羽と緋梛(ひな)も東部局側で使わせていただきますのでご理解ください」

一通り各人の報告が終わると椅子に深くもたれかかってオレグがで、とランバートと藍李を見る。

「緑笙(ろくしょう)はどこ行ったんだよ、緑笙は。いい加減口割れよ。お前らなにか知ってるんだろ。だいたい玉陽が大変だってのになんで黒羽持って帰ってあげくにあの可愛い皇子様まで使って聖地の査察させんだ。藍李ちゃん、いつまでもすましてないで答えてくれよ。美人でもかわいげがないといつまでたってもお嫁にいけないぞ」

「緑笙に関しては行方不明です。何も知りません。聖地は長期にわたり査察をおこなっていないので私が就任したのを機に始めるだけのことです。玉陽の皇子を使うのはいいでしょう。無給で監理局に奉仕してもらえるので経費の削減です。黒羽は皇子の監視役です。支局においてふたりは懇意にしていたので事を潤滑に進めるにはいいかと」

にっこりと微笑んで藍李はオレグを見る。

まさかアデルがまだ生きていて聖地を荒らしているなど言えるはずがない。あげくにかつては女神に並び立つ力を持った神がいただとか魔族がその力ある神に使える下級神族の末裔だのということは監理局のどころか世界の根底をくつがえし多大なる混沌を招きかねない。

事実だろうそれが秩序を乱すというのなら嘘を貫き通すまでだ。

たとえ同じ神剣の宗家当主相手であろうと。
「……自分からも、いいですか。緑笙と緋梛の誘拐事件は緑笙の自演であり、緋梛は巻き込まれただけという報告でしたが、緑笙の目的がいまだ不明確で他にも様々なことが曖昧ですが何か進展はあったのでしょうか」
ハイダルが緊張していながらもよく通る声で問う。
「それに関してはこちらとしても把握し切れていない。……兄が、記録に残していないなにかを仕掛けている可能性が高いと思われる。オルフェ家は責任をもって早急に緑笙を捕縛し全てを明確にし、情報を開示する」
淡々と答えるランバートの言葉をずいぶん嘘がうまくなったものだと藍李は冷めた気持ちで聞いていた。
「なんならこっちも人貸すぜ。オルフェだけでやるよりは協力した方がいいだろ。居所の手がかりとかは何にもねえのか？」
「あ、南部局側でも協力します！」
まだ疑わしげな顔をしているオレグの提案にハイダルが素直に同意する。
「いえ。手がかりもまだ何も。何か分かり次第こちらから協力をお願いすると思うのでその時に」
ぼそぼそと喋るランバートの陰鬱さにオレグがなげやり返事をしてハイダルがうつむく。
「ええ、その時は東部局も協力するので出来だけ早くお願いしますね」
藍李が棘のある言葉を投げると正面にいるランバートが目をそらした。
こういう所が苛々するのだ。昔から自分に非があると分かるとすぐに責任逃れするように視線を別にやる。
「ああ、もうやだね。辛気くさい。だいたいお前は嫁さん貰ったんだからもうちょっと明るくなれよ」
勢いよく立ち上がってオレグがランバートの片頬をつまんで無理

矢理口角を上げさせようとする。いい気味だと思いつつ助けを求められないようそっと顔をそらした藍李は目を丸くしているハイダルと視線が合う。
止めたほうがとハイダルの瞳は戸惑っているが、放っておけばいいのよと声に出さずに口の動きだけで伝える。
「いえ、まだ結婚は……」
なされるがままの状態でずれた眼鏡を直しながらそう答えるランバートは一週間前に父の旧知の仲である小国の貴族の娘を屋敷に迎え入れている。
神剣の血族は神剣が浄化する瘴気にあてられて次第に体の内側が腐っていく腐蝕と呼ばれる症状によって四十年ほどしか生きられない。二十二で独身というランバートを周囲は密やかに心配していたが、二月前に婚約したと報告があり先週ようやく相手を屋敷に迎え入れたらしい。
「でももう一緒に暮らしてんだろう。なら夫婦同然だろ」
オレグはランバートの残った片頬もつまんでしまう。
「だから、まだ正式には婚姻の誓約は行っていないので」
「え、なんだ。まさかまだやってないのか。おい、おい、早くしろよ。跡継ぎ作るのも重大な役目なんだからよ」
ランバートの頬から手を離してオレグがなあ、と白けた顔の藍李と真っ赤になって固まっているハイダルに同意を求めてくる。
「そうね。私も嫁き遅れてるから早くいい人見つけないと。誰かいい人紹介してくださらない？　出来ればうちの黒羽みたいなのがいいんだけれど」
「あんな女の幻想寄せ集めたような男現実にいるわけねえだろ。いくら藍李ちゃんが絶世の美女でも贅沢言ってたら本当に結婚できないぜ」
ご忠告どうもと藍李は笑顔で返しながら内心ではため息をつく。
正直今は結婚して子供を産んでいるどころではないがそれもまた重要なことだ。遅ければ遅いほど子供に早くから総局長としての任

についてもらわねばならなくなる。
一応候補は立てているが、本人に切り出すのはもう少し落ち着いてからだろう。まあ、言ってもまずは全力で拒否されるだろうが。
「え、ええと。本日の会合は以上なんでしょうか」
身の置き所がなさそうに縮まっていたハイダルがおずおずと声を挟むとオレグがちらりとランバートを一瞥する。
「他に話すこともねえから終わりだろ。さあ、帰って飲むか。どうだ、坊やも一緒にのまないか」
「いえ、自分は父に報告しなければならないし職務中なので……あの、もしかしてもう飲んでらっしゃるんですか！？」
オレグに肩を叩かれたハイダルがその呼気からわずかに匂う酒臭さにぎょっとした顔をする。
「だから酔っ払いって言ったでしょう。その人水代わりにお酒飲んでるんだからまともに相手しちゃ駄目よ」
酔っ払い、とは言ってもオレグは飲んでもたいして酔わないらしくいつも呂律も思考もはっきりしている。だからあまり飲んでいることには気づかれていないが一部では飲んだくれで有名だ。
「なんだよ、冷たいなあ。じゃ、上手い酒と可愛い女房と娘が待ってるんで俺は戻るな」
ひらひらと手を振ってオレグが退出し、綺麗なお辞儀をしてハイダルが後に続く。
藍李はふたりを見送るふりをして入り口に立ちランバートの退路を塞ぐ。
「……何度も言うが兄上の居場所は知らない」
ランバートが先にそう言って、藍李は腕を組んで閉めた扉にもたれかかる。
「それは分かっているわ。次の日蝕の場にあの人は現れるの？」
アデルの計略に日蝕が重要な鍵になっている。次に目星をつけている聖地の日蝕まであと二週間だ。
「それもわからない。兄上の気分次第だろう。次の事象は玉陽の要

が変質したときに始まっている。表面化するのが日蝕の時、そういうことだ」
「他に要はあるの？」
問い返して、藍李はランバートの瞳が揺れるのを捉える。
いくら彼が口で嘘を吐くことが器用になっても直接視線を交わせばすぐに見破れる自信があった。
「あるのね。それともうひとつ聞かせて。黒羽の完全同期にまだあの人はこだわっている？」
神子は妖刀や魔剣と同じ波長の強大な霊力を持つように意図して創られているのだ。それにより妖刀や魔剣から放たれる力は尋常ではないものになる。そして普段神子は妖刀や魔剣に精神を取り込まれ暴走するのを抑えるために本能的に波長を合わせすぎないように制御している。その制御を取り払い、かつ神子の精神を正常に保ちながら波長を一致させることが完全同期だ。
最初に創られた神子、蒼壱（あおい）で行われた完全同期は魔剣が破砕され彼が言葉を失って失敗に終わってしまった。
そうして玉陽の反乱のさなか、アデルは再び黒羽で完全同期を実現しようとしていた。
おそらくまだ、黒羽にはなにかある。だからこそこちらに連れてきたのだ。
「兄上は失敗を失敗のままでは終わらせない」
ランバートの返答に藍李は扉から離れて道を開ける。
「それだけでも聞けてよかったわ。……そういえばまだ言ってなかったわね。婚約おめでとう」
口調を和らげて言うとうん、と部屋に出ながらランバートがうなずいた。その表情はどこか沈鬱でもの悲しげだった。
「……ちょっと、なんなのよあの顔」
ひとり残されてから藍李はそうつぶやきながら眉根を寄せた。
なぜだか彼に酷いことをしたような気分にされてたまらなく不快だった。

＊＊＊

黒羽と漓瑞が藍李の執務室を訪ねたとき、ちょうどその部屋の主が帰ってきたところだった。

「……今終わったのかって、なんだよ」

顔を見るなり正面から藍李が抱きついてきて黒羽は怪訝そうに眉根を寄せる。

「大して収穫なかったけど頑張ったから頭撫でて」

三つ年上の藍李が胸に顔を埋めて甘えた声でおねだりしてくるので黒羽は仕方なしにそのふわふわした赤毛をなでつけるようにした。

とにかく彼女がこんな風に愚痴を言って甘えてくるときは疲れている証拠だ。自分がしてやれることはこうしてちょっとしたおねだりをきいてやることぐらいである。

「なんかあったのか」

「これといってなんにもないけど酔っ払いの相手が面倒だったぐらい。あとは、うん。そうね、私これからあんたに嫌な思いさせるかもしれないけど嫌いにならないでね」

酔っ払いってなんだ、とか何しでかす気なんだなどと考えつつ黒羽はそのまま藍李の背を軽く叩く。

「納得できるかどうかはわかんねえけどよ、まあお前のことはずっと好きだと思うぞ」

自分と藍李の性格は真逆だ。頭のいい彼女の行動は正しいとは分かっていても理解してやることは出来ないこともある。

だからといって藍李を嫌うことは出来ないだろう。

「あー、やっぱり結婚すらなら黒羽がいーいー」

駄々をこねながら藍李が抱きついてくる力を強めてくる。

さすがにそれは無理だと思いながらも黒羽が藍李の好きなようにさせてやっていると背後でため息が聞こえる。

「……おふたりとも、仲がいいのはよろしいのですがここは廊

下の真ん中ですよ」
藍李の眼中に全く入らず黒羽を持っていかれていた漓瑞が冷静に指摘した。
「いいじゃない。こんなとこ誰も通らないわよ。人の心の癒やしの時間邪魔しないでよ。ども、十分癒やされたからいいわ。さあ、本題に入りましょう」
恨めしげに言いながらも藍李が抱きついたままだった黒羽から離れる。
執務室に入る時にはすでに彼女はいつも通りのきびきびとした歳媛の顔をしていた。毎回の事ながらこの切り替えはもはや感心するより他ない。
「アデルが出てくることが五分五分ってとこだけど明日から予定通りタナトムに行ってちょうだい。第九支局に聖地の査察に本局からふたり派遣するって言ってあるから聖地までの案内とかはそっちで頼んで。すこしでも変化が見られたらすぐに連絡すること。これぐらいかしらね。第九支局の管轄区のタナトムは信仰心も適度に厚くて政情も落ち着いてるから動きやすいと思うわ」
そうして藍李があらかじめ長卓に広げている地図を示す。
あるのは世界図ではなくタナトム国のものだ。藍李がその地図の中央を示しここが王都で第九支局もここと言う。
「そして、聖地がここですね」
王都のすぐ隣に広がる森を漓瑞が指さす。
「……さっぱり覚えてねえ」
確か先週ぐらいにあれこれ教えられた気がするがまるで覚えてなかった黒羽が唸ると藍李と漓瑞が顔を見合わせる。
「とりあえず黒羽さんには私がついているので」
「まあ、最初からそこは期待してないからいいけど。黒羽のことお願いね」
戦う以外能がないのは十分自覚しているので黒羽は何も言い返さずに続くふたりの小難しいやりとりを傍観する他なかった。

そうして翌日、黒羽と漓瑞は予定通りタナトムに出立したのだった。

1

各局の地下にある次元の歪んだ水路を渡し人とよばれる一族の船頭が漕ぐ舟に揺られて進むこと一刻あまり、黒羽と漓瑞は南大陸東部に位置する小国、タナトム王国の東部第九支局にたどりついた。

「なんか変わった建物だな」

地下水路の船着き場から局舎へ上がり、黒羽は物珍しげにあたりを見回す。

洞穴の内部の壁を滑らかにしたような内壁だ。天井も半球状でなにやら複雑な文様が刻まれている。

「山っていうか丘の上なのか」

一定間隔でうがたれている木製の鎧戸はちょうど人ひとり分ぐらいの大きさがあり開け放たれているので覗き込まなくてもちょっと目線をやれば外を一望できる。支局は小高いところに立っているらしく木の柵に囲まれた赤茶色の町並みが眼下に広がっていた。その中央にはやはり赤茶色の外壁でドングリの帽子のような形をした屋根を持つ建物が両翼を広げる様にしてそびえている。あれが王宮だろう。

そしてその向こう、柵の外には水田らしきものが広がっているのが見えてさらに奥には森らしきものがある。

「あの森の中に聖地があるそうですよ。それにしても思っていたより暑いですね」

確かに暑い。玉陽ならばそろそろ上掛けを一枚増やそうかという時期なのに肌にまとわりついてくる熱に汗ばむ。大きな窓から風は吹き込んでくるものの湿っていていまひとつ涼しくない。

事前に蒸し暑いとは聞いていたがここまでだとは思わなかった。

「まあ、こればっかりは仕方ねえな。よし、まずは支局長に挨拶して案内つけてもらう、だな」

「ええ。この通路をまっすぐ行って左手に曲がって……」

船着き場に見回りに出ようとしている局員がいたので支局長室の場所をきいたが黒羽は覚えきれなかったので漓瑞に前を任せて進む。
すれ違う局員は皆浅黒く焼けた肌と黒や焦げ茶の髪の色がほとんどで、見るからに他からやってきたと分かる色彩と目立つ容姿の黒羽に物珍しげ視線を向けてくる。そして隣にいる漓瑞にも気づいてその容姿の可憐さにもう一度感嘆したような表情をする。
「で、こっちですね」
黒羽が目立つのはいつものことなのでふたりは気にせず真四角い柱が並ぶ柱廊を渡る。そうしているとすぐに目的の場所にたどり着いた。
扉がなく簾がかかっている部屋の入り口の脇には局長室という文字が書かれた板がかけてあり、その下に小さな鐘が吊されている。
どうやら叩く扉がないかわりにこれを鳴らすらしいと黒羽は鐘を鳴らす。
「はい、どうぞ」
落ち着いた初老の女性の声が聞こえて黒羽達は失礼しますと中に入る。
「すいません、本局から聖地の査察に来たんですけど」
黒羽がそう言うと髪に白いものが混ざる恰幅のいい東部第九支局長が重たげに体を揺すって立ち上がる。
「ええ、伺っています。さあそちらへどうぞ」
竹で出来た椅子に促され、黒羽と漓瑞が従う。
「すぐにあちらに行かれるのですか？」
「はい。だから案内に人を貸してほしいんですけど、いいですか」
黒羽が問うともちろんと第九支局長がにっこりと微笑む。話はすんなり進み、ふたりは隣の部屋から呼ばれた総務部の男性局員に聖地警備係という部署に案内されることになった。
その時に持っていた着替えなどが入った荷物は客室に運んでもらえることになり、冥炎以外は持たずに東部第一支局にはなかった部署に向かいながら黒羽そういうのあるんだな、とは漓瑞に言う。

「玉陽の聖地は見張っていなくもてうかつに立ち入れる場所ではなかったですからね」
聖地はかつて女神が降り立った土地で神聖な場所でみだりに人が踏み込んでいることを禁じられている。こうしてきちんと部署が設けられているということはよほど入りやすい場所なのだろう。
聖地警備係の部屋に入ると幾人かの女性局員が顔をみあわせてなにか言い合っている。見られるのには慣れているが、ちらほらとかっこいいだの可愛いだの単語が聞こえてくるのは少々居づらい。
「イジュ！　ちょっとこっちへ」
係長という男性がそう言うと奥の棚の影から十六、七の少女が三つ編みにしたおさげ髪を揺らして跳ねるようにしてやってきた。
そして口を半開きにして黒羽を見上げる。
「か、係長、この方達は……本局の、は、はい！　責任持ってご案内します！」
自分が呼ばれた理由を係長から聞いたイジュが黒羽達に向き直ってぺこりと頭を下げる。
「黒羽だ。イジュ、よろしくな」
イジュの仕草の愛らしさに黒羽が自然と顔を綻ばすとイジュはぱっと頬を赤らめてうなずいた。
同じように漓瑞が自己紹介をして挨拶をすませ、三人で船着き場へと行くことになった。
「イジュはいくつなんだ？　あたしは十七だ」
「あたしも同い年です！　って、え？」
黒羽の一人称に気づいたイジュが首を傾げ、漓瑞が鈴を振るような笑い声を漏らす。
「黒羽さんは女性ですよ」
そう言われたイジュがまん丸い目をさらに見開いて黒羽を見上げる。
「え、嘘。ごめんなさい！　てっきり男の人と思っちゃってて……」
もう何度きいたか分からない言葉に黒羽は慣れてるから気にする

なと苦笑する。
「ごめんなさい。本当にかっこよかったんで……あ、持っているのは妖刀、ですか」
少し羨ましそうな視線でイジュが黒羽の腰の冥炎を見る。うなずきながら黒羽は幅広の帯が締められているイジュの腰にはなにもないのにそんな顔をされることを不思議に思いながら剣は使うのかと問い返してみる。
「いえ、全然。剣だけじゃなくて武術全般苦手で……本当は魔族監理課の監理係志望だったんです。符術は使えるけど実戦には向かないって事で警備に配属されたんです。警備でも戦える人は人員不足とかで監理係とかに移動は見込めるんですけど、あたしみたいなのはまずないんですよねえ」
時に魔族は人間と同じように罪を犯す。それを取り締まるのが管理係で妖魔を滅する妖魔監理課の次に戦闘能力を求められる部署だ。選抜試験もあるので武術が苦手となると確かに希望が通るのは難しい。
符術は文字に霊力を込め紙に書き、さらに投げるさいに力を増幅させて攻撃する高等技術で通りやすいが、ある程度体術が出来なければ現場では足手まといになるので別部署で台帳係などの使う護符書きに回されるのが普通だ。
「戦闘以外で符術を使うということは結界を張っているということなんですか？」
漓瑞が興味深そうに問う。
「そうです。ええと、よく侵入者を察知するために紐に足引っかけたら鈴が鳴るって奴があるじゃないですか。あんなかんじで進入があった場所の近くの符と連動させてる符から音が出るようになってるんです。ああ、そうだ。だから反応しないようにこれ持ってないと」
イジュがどうやら内袋がついているらしい腰帯から符を取り出して黒羽と漓瑞に渡す。

「絶対にこれを肌身離さず持っていてください。一回警鐘が鳴るとそこの符はまた作り直さなくちゃならなくなるんです」
これがけっこうたいへんでとイジュが笑う。
「そう頻繁に人が入ってくるのか、そこ」
まるで作り直したことがあるかのような言い方に黒羽が訊く。
「年に一回か二回ぐらいですね。女神様が残した宝があるとかそういうおとぎ話みたいなの信じて入って来ちゃう不信心者がいるんですよ」
「動物などは引っかからないのですか？」
「それが引っかからないんです。森の中に狸とか猪とかいろいろといるんですけど聖地の周辺だけはまったくいなくて近寄らないみたいですね。動物の方が女神様のお力を感じてるのかもしれません。あ、じゃあ行きましょうか。舟で行くとすぐです」
話している内に船着き場について三人は舟に乗り込んだ。それから本当にわずかの間に舟は目的地についた。
船着き場から地上にあがるとそこは掘っ立て小屋で、外に出ると緑と土の匂いが一気に体の内側に入り込んでくる。
「もう、ここは聖地の一部なんですね」
何かを感じるのか、漓瑞が刻印の刻まれている自分の手をもう片方の手で握りしめながら目を細める。
「しっかしすごい森だな。人とか入ってこれるのか、ここ」
黒羽は周囲で好き放題に枝を伸ばし葉を茂らせる巨木達を見る。鬱蒼としたこの森ではすぐに迷子になってしまいそうに思える。
「意外と入って来れるんですよね、これが。ほら、あそこに石、見えるでしょう。あれがずっと森の外に続いてるからたどればすぐなんですよ」
言われて見てみれば地面に石を敷き詰めて舗装されたような名残があった。
「ちゃんと行き来がなされていたんですね」
「昔の王様が時々ここに遊びに来られていた女神様に供物を供える

ために使われていた道らしいです。あれさえなければ入ってこれないんですけど女神様のために作られた物なのでそういうわけにもいかないんですよね。で、奥に向かう道はこっちです」
イジュが舗装の名残をたどりながら先に進む。それを追っていると木の箱がくくりつけられている樹木があった。
「これが、結界の符ですね」
漓瑞が言うのにイジュが雨よけに箱に入れているのだと答える。そこからまた少し進むと急に視界が開けた。
目の前に広がるのは廃墟だ。石の柱が倒れて積み重なって木の蔓が巻きついているものがあちこちに散布していて所々に崩れた赤茶色をした直方体の石も散らばっている。きちんと舗装されていただろう地面も床石が割れたり剥がれたりして土がむき出しになり奥の方には石や柱が積み重なってちょっとした小山になっていた。
「かなり広いな。これ全部は一日じゃちゃんと周り切れねえよなあ。まあ、二週間あるしゆっくりやるか」
「さすがに一日は無理ですね。ここが中心部で奥に舗装された道がまたあってここより狭い建物跡がいくつかあるんです」
これはそこそこの広さがある街のようだ。下手にうろついていると迷子になりそうな気がする。
「地図とかはねえんだったけか」
たしか藍李からそんな話を聞いたようなと黒羽は漓瑞を見てそう尋ねる。
「ええ。詳細は記さないことになっていますね。一通り案内してもらえますか。簡単に場所を覚えるぐらいなら出来ますので」
「はい！　でも明日以降もおつきあいしますよ。あたしの仕事って一日一回符の点検するぐらいですから」
意気込むイジュに黒羽は困った。せっかくの申し出だが何が起こるか分からないのでそのときに彼女を巻き添えにしてしまうようなことになるのは避けたい。
「ついてもらえたら助かるんだけどな、細かい調査はあたしらだけ

でやらなきゃならねえんだ」
そう言うとイジュが残念そうに肩を落とすので黒羽はいたたまれずにその頭を軽く撫でる。
「わかりました。じゃあ今日は順路だけでもご案内します」
そうするとすぐに気を取り直したイジュが顔を上げてにっこりと笑った。
そんな明るい彼女になんとなしに温かい気持ちになりながら黒羽はその後をついていく。
瓦礫の小山を迂回して回った先に一本だけ残る柱の向こうは森だが躊躇わずにイジュは入り込んでいく。ほんの数歩いけば舗装の痕が地面にあってこれなら黒羽でも覚えられそうだった。
「中の見回りはよくするんですか？」
まったく迷うそぶりを見せないイジュに漓瑞が問いかける。
「いいえ。侵入者がいたときに点検するだけです。だけど一度は必ず道を覚えるようにしなければならないんです。このあたりはまだ瓦礫だらけで行き止まりとかがあるんですけど奥の方はあんまり崩れてないんでわかりやすいと思います」
イジュの言うとおり奥へ進むとなんとか建物は形を保っていた。だがどれも木の根に抱かれたり草に覆われて荒廃している。
石橋のようなものの橋脚をくぐった先には左右に大きな岩壁があってどちらにも首のない人物が彫り込まれ、巨人に迎えられている気分になる。
「あれって、砕かれてるのか」
見上げてみれば巨人の首から上は土で打ち砕かれたようになっている。
「これちょっと恐いですよね」
イジュが見大きくうなずきながら道に横たわる木の根を飛び越えるとおさげにした三つ編みも一緒に跳ねる。
「黒羽さん」
妙に愛くるしいなとその後ろ姿を見ていた黒羽は漓瑞に呼び止め

られて振り返る。
「なんだ？」
「異様なものを感じます。なにがどうと説明できるわけではありませんが……とにかく奥へイジュさんをつれていくのはやめたほうがいいかもしれません」
透き通るような白い肌を青ざめさせている漓瑞に黒羽は先へ進もうとしているイジュを呼び止める。
「悪い、今日はここまでいい。引き返すぞ」
「はい……」
きょとんとした顔でいながらも素直にイジュは道を引き返そうとしてくるが、急に立ち止まった。
「どうした？」
「足跡！　足跡があるんです。さっき見逃してたんですけどおかしいなあ。半年は誰も入ってないはずなのに……」
黒羽はすぐにイジュの元に駆け寄る。
確かに舗装がはがれてむき出しになった地面には靴痕がある。だが予想した子供のものでなく大人のものだった。大きさからして男のようだ。
ランバートだろうか。あるいは彼の腹心の部下であるカイルか。
「符がないと入れないんですよね」
後についてきた漓瑞に絶対だとイジュがきっぱりという。
そうなるとなおさら符術を得意とするアデルが怪しい。イジュはこの場にはおけないし先に藍李に連絡した方がいいだろう。
黒羽と漓瑞はそう判断し、不思議がるイジュを適当に言いくるめて来た道を引き返した。

2

黒羽達は引き返してすぐに藍李に今日の報告の手紙を送り第九支局内の客室に案内された。
「どうしましょう。女の子だって知らなくて一つしか準備してないんですけど」
そして黒羽の性別を訊いた女性局員が困り果てていた。
「別にかまわないですよ。あたしら親子みたいなもんなんで。なあ」
「ええ、まあ。そういうことなのでお気になさらず」
ふたつの寝台の間に木枠の中に織物を貼った仕切りがあるのを確認して漓瑞がそう言うと女性局員はほっとした顔で後で食事を持ってきますと去って行った。
「ちょっとは涼しくなったな」
黒羽は鎧戸の前に置かれた竹製の長机とそれに添えられている同じく竹製の長椅子に腰を下ろす。もう鎧戸の向こうの空は赤く、湿った風も少しは涼しい。
「そうですね。食事が終わったらお湯をもらってきましょうか」
漓瑞が黒羽の頬に汗で張り付いている髪をはらってその隣に腰を下ろす。
「お前は全然汗かいてねえな」
彼の肌は見るからにさらりとしている。魔族ということもあるだろうがそれにしてもひとりだけ涼しげに見える。
「暑いんですけどね、これでも」
「全然そう見えねえけどな。……ああ、それよりよ、聖地が変なのってどんなかんじなんだ？　魔族なら分かるような変化なのか？」
あの場にいても自分はまるでなにも感じなかった。一緒にいたイジュも何かを察知している様子はなかった。
「たぶん、私にしか分からない変化だと思います。……やはり、内

側は変質しているようですね」
　漓瑞が左手の甲を上にして少し持ち上げる。そうすると刻まれている刻印から水が湧き出してその手に蛇のように絡みつく。かつては何か物を水にかえてと媒体が必要だったのに今の彼はこの通りだ。
　漓瑞は玉陽をかつて治めていたという神の末裔であり瘴気を神剣なしに浄化するという女神の力を持つがためにアデルにその肉体を完全に神のものへと変質させられそうになっていた。その人格が失われる前に救出したがやはりなにかしらの変化があるようだ。
「なんか悪いとことかはないんだよな」
　黒羽は焦燥を滲ませた青鈍色の瞳を向けると漓瑞はふわりと微笑んでみせた。
「心配はいりませんよ。神のものなら悪影響は及ばさないでしょう」
　言われてみればそうだがどこかまだ不安が残ってしまう。
　漓瑞の心配ないは以前の事もあってあまり信用できない。それにいつだって自分を心配させないようにと優しく微笑んでいるので表情から何か読み取るのも難しい。
　だが問い詰める様なことも出来ずに黒羽は仕方なしに明日からの事を漓瑞と話す。
　まずはイジュから行けなかった場所に続く道の目印を訊いて、あの足跡周辺を調べること。とにかく侵入者が何者なのかはっきりするまでは二手に分かれるのはやめて一緒に行動すること、と決め、後は状況判断でということになった。
　話している途中に運ばれてきた食事も終えて汗で汚れた体を拭こうとお湯を貰おうとすると、掛け湯が出来る浴場があるということなのでありがたく使わせて貰うことにした。
「短いと楽そうだよなあ」
　頭から湯を浴びてさっぱりとして部屋に戻った黒羽は髪の水気をぬぐいながら漓瑞を見てぼやく。
　別の浴場を使った彼の髪はすでに乾き始めていてほどよい湿り気に漆黒の髪の艶を増している。対して自分の鉛のような鈍い光を放

つ灰色の髪はまだ幾分重い。
「やりましょうか？」
面倒臭がってすぐに髪をぐしゃぐしゃにしてしまいそうな黒羽に漓瑞が苦笑しながらそう申し出た。
「いや、自分で出来る……」
なんとなしに漓瑞が離叛する少し前に濡れた髪を乾かして櫛で梳いてもらったこと思い出しながら黒羽は根気強く丁寧に水気を取っていく。
切りたい気持ちもあるが子供の頃からの思い出などもあるので当分は伸ばしたままだ。
「よく出来ました」
終わると漓瑞が黒羽の髪に指を通して楽しげにくすくすと笑う。
子供扱いはいつものことだし、何も変わらないことが心地よくて黒羽は漓瑞と視線を交わして笑みを作る。
「なあ。全部終わったらさ、お前も玉陽に帰らせてもらえるよう藍李に頼もうぜ。やっぱりお前がいないとなんか足りない気がするんだ。あの場所だけじゃなくて、お前がいてあたしの故郷なんだと思う」
黒羽がそう言うと漓瑞がふっと笑顔を消してしまう。
「……これは罰です。私は皇家の最後の人間として間違ったことをしたとは思っていません。ですが監理局に女神への忠誠を宣誓し、それを破ったことは紛れもなく罪です。そう容易く許されるものではありません。そして女神の代行者である神剣の宗主として藍李さんも一度決定を下したことを簡単に翻すことはできません」
漓瑞の言うことは文句のつけようがない正論だった。黒羽は椅子の上で膝を抱え、そこに顎を乗せる。
「あ、そうだよな。悪い、あんまりそういうことはちゃんと考えてなかった」
ただできるだけ近くで一緒にいられたらという単純なことしか頭になかった。

とことん直情的な自分は少し嫌になる。
「いいんですよ。あなたはそういう素直なままで」
素直というより単に頭が悪いだけのようなと自虐的な事を考えつつ黒羽は漓瑞に頭を撫でられて目を細める。
今なら多分に藍李の気持ちが分かる。こういうのはとても気分が落ち着く。
「もうお休みなさい。明日は早くから出ましょう」
落ち着きすぎて眠たくなりあくびをすると漓瑞に寝台へうながされた。
黒羽は側に立てかけて置いてある冥炎を寝台の側に置き直し大人しく横になることにする。薄い上掛けを羽織ってすでにうつらうつらしながら今日は寝ないのかと漓瑞に問うてみる。
「ええ。今日は眠れそうにないので。おやすみなさい」
頻繁に眠りを必要としない魔族の漓瑞におやすみとかえして黒羽は目を閉じ、そしてすぐに眠りについたのだった。

＊＊＊

黒羽の静かな寝息をききながら漓瑞はため息をつき自分の胸の辺りを押さえる。
神剣の血族と同じように半分人の血を引いている自分には腐蝕が起こっていた。もはや残り一年生きられるかどうかすら危うい状態で頻繁に吐血していたが、肉体を変質させられかけてからは血を吐くことも体の内側が傷むことはなくなった。
しかし、腐蝕がなくなったわけではない。最初に血を吐いた以前のざらついた違和感が確かに内側にある。
あの時意識を深い場所へ引き込まれ霧散しかけながらも黒羽の声にわずかに自我を留めた自分に呼びかける声があった。
――今、もう一度外へと戻ってもその肉体はすぐに朽ちるでしょう。我らの時にして瞬くより早く、人の時にしてもささやかな間でもあ

ちらに戻りたいのなら行きなさい

あれは、自分の祖先という神の声だったのだろうか。

死期は数歩だけ先に進んだだけでその背中はよく見える。追いつくのはそう遠くない未来。五年、いやそれより短いだろう。

とにかく吐血が始まる前には黒羽には伝えなければならないが、と漓瑞は黒羽の眠る寝台の側に寄りそこに静かに腰をかけた。

呼吸から感じるとおり深く眠っているようで起きる気配どころか身じろぎすら彼女はしない。

まだあれから一月あまり。急激な環境の変化についていくのに精一杯な黒羽に今このことを告げるわけにはいかない。

「どうしてあなたは変わらないんでしょうね……」

答えが返ってこないと分かっていながら漓瑞は黒羽に問いかける。

もうこれが最後だろうと黒羽の寝顔を眺めた夜。あの日と同じように安心しきって黒羽は眠っている。確かに自分は裏切ったのに。あげくに追いかけてきた黒羽が負傷しすぐに治療しなければ助からないと分かっていながらもその場に放置したのに。

なにも変わらない。変わらず、自分に甘える仕草を見せたり一緒にいるのが当然かのように言って。

「……」

何かを言いかけて、漓瑞はやめる。口を噤んだときには自分でも何を言おうとしたのか覚えていなかった。ただ黒羽の側にいることが落ち着かなくなり、窓辺に立つ。

夜気はほどよい涼しさがあるが湿り気は変わらない。空は晴れてるように見えるが細い弓月や星がじんわりと滲んでいてうっすらと雲があるようだ。

明日は雨だろうかと夜空を見ながらしばらく佇んでしていると緊急事態を知らせる警鐘が鳴るのが聞こえた。

それと同時に条件反射で黒羽がすぐに起き出す気配がする。振り向くと彼女は薄暗い中でも冥炎を手に取りすでに腰に差していた。

「なんだろうな」

すでにさっきまで熟睡していたとは思えないしっかりした口調と顔で髪を縛りながら黒羽が言う。
「私たちが関わるような事ではないのではとは思いますが……」
夜に妖魔が出たり魔族が何かしでかすことはままあるので支局の通常業務の範囲だろうと思うが、警鐘が鳴るということは現場の局員では手が足りないということだ。
そこそこ大きな事件なのかもしれない。
「何があったか聞いてくるか。またアデルが何か仕掛けてるのかもしれねえしな」
「誘拐事件等の報告は聞いてはないので大丈夫だと思いますが、念のために聞いてきた方が良さそうですね」
黒羽の意見に漓瑞は同意してふたりで廊下に出る。
客室は教務部のすぐそばで事情はすぐに掴むことが出来ずに監理部側へと出ようとすると途中にある医務部にイジュの姿があってふたりは足を止めた。
「あの！　ルークン係長の容態は！！」
医務部の局員に詰め寄るイジュの声は震えていた。
「……いまはなんとも。とにかく落ち着いて。部長も全力を尽くしていますから」
重々しい口調の医務局員の言葉にイジュが顔を覆い、嗚咽をこぼし始める。局員は廊下に置かれている長椅子へと彼女を促して仕事に戻っていく。
どうやら彼女の親しい人間が負傷し危うい状態のようだ。
「イジュ！」
黒羽がイジュに駆け寄り、彼女の前に屈んでその背をさする。漓瑞はその後ろに歩いてついていった。
「あ……黒羽さん、あの、あ、っ……」
ずいぶん混乱しているのかまともに喋ることも出来ずにイジュはそのまま黒羽の肩に顔を埋めてまたわんわんと泣き始める。
これではろくに事情がきけそうにないと漓瑞は周囲に視線を巡ら

せなにか事情を聞ける人を探す。そして通りがかった局員を捕まえた。
「強盗殺人だそうです。現場近くに居合わせた監理係の係長が負傷されて犯人の魔族は逃走中だそうです……ああ、イジュさんですか。たしか六年前にご両親が同じように魔族に強盗殺人で亡くされて、まだその犯人も捕まってなくてその関係で係長とは懇意にされていて。いやだわ。昔の事件と関係あるのかしら」
言いながら眉宇を曇らせて局員がイジュに視線をやり、漓瑞も同じようにそちらを見る。
管理係志望の動機はごくごく単純なものだったようだ。
「ありがとうございます。係長のご家族などは？」
「三年前に亡くなられた奥様しか家族はいないようで、同僚の方々はみんな犯人を追っているところでしょうし……」
そうなるとイジュしか今は付き添える人間はいないということのようだ。事件は聞く限りはこちらには関係のなさそうだが。
漓瑞は今はイジュの隣に座ってその肩を抱いてやっている黒羽にひっそりとため息をついて椅子の端に腰を下ろした。

3

翌日、黒羽は聖地に向かう舟で口元に手をあててあくびをする。
明け方近くになってようやくルークン係長の治療は終わって一命はとりとめたものの意識は戻っていない。医務部の局員が定期的に霊力を送り込んで状態の維持はするものの五日以上目覚めなければ覚悟はしておいた方がいい、ということだ。
「イジュのやつ、大丈夫かな」
憔悴しきっていたイジュのことが気にかかる。両親を亡くしてから面倒を見てくれていたという教務部の女性局員が朝には来てくれたので彼女預けたから後はその人が上手く寄り添ってくれるだろうが。
「ルークン係長の意識が戻るまでは気が気ではないでしょうね。事件は私たちには関係なさそうですし、後は支局の方に任せるしかないですね」
「ああ。早く捕まるといいけどな」
犯人の魔族は跳躍能力が突出していて街の囲いから出てしまった可能性があるらしいのでそうなると捕縛には時間がかかりそうだ。
自分が気にかけてもどうしようもないと分かっているがついついそちらに意識を傾けてしまっているうちに舟は到着した。
「雲が出てきたな」
外に出て上空を見上げると黒い雲が空の向こうから押し寄せて来ているのが見えた。今日は昨日にも増して空気が湿っぽく熱さがべたつく。
「降り出す前に少しでも何か見つけましょう」
そう言う漓瑞の記憶をあてにして昨日の足跡のあった場所へと向かう。その途中も注意深く地面を見るが足跡のようなものはない。
それどころか昨日見たものまでどこにあったか分からなくなって

いる。
「あれ、この辺じゃなかったか？」
たしか横たわる木の根のそばだったようなと黒羽は首をひねり漓瑞に確認を取る。
そのはずですが、と漓瑞も顎に手を当てて考え込みながら近くの床石に触れる。
「これが、動いているのかもしれません、これは石畳が剥がれているのでなくて元からこういう風になっているのだと思います」
地面の石畳は言われてみれば規則的に並んでいるようにも見え。
「動くのか、これ？」
黒羽は試しに石を押してみるが、びくりともしない。漓瑞がそれを確認してから巨人の並ぶ壁の方へ移動してそれをじっと見つめ始めた。そしておもむろに壁の一部を押してみていた。
そうすると黒羽の足下の石畳が一部むき出しの地面へとずるずると移動していく。
「お、動いたぞ。けどなんか意味あるのか？」
「少し奥で何か音がしたのでそちらになにかあるようですが……」
人より五感の優れている魔族の漓瑞が奥へと目を向ける。やはりそちらにはうかつに足を踏み入れたくないのか迷いが見える。
「あたしらが動かなきゃどうにもなんねえだろ。とりあえず行ってみようぜ」
黒羽は冥炎の柄に手をかけて奥へと歩き出したが、漓瑞に止められる。
「私が先を歩きます。なにか感じたらすぐに知らせますから」
行くなと言われるかと思ったが、実際漓瑞が言ったのはそんなことで黒羽はその通りに彼の後ろについた。
巨人の並ぶ区域を通り抜けると辺りは森だった。しかし点々と瓦礫が転がっていて道に迷うことはない。次にたどり着いたのは真四角い空間に塔が何十も並んでいる場所だった。ところどころ崩れた周りの木々よりも高い石壁が周囲を囲い、塔も半分ほどは崩れ瓦礫

が散乱して足場が悪い。
「黒羽さん……なにか来ます」
　漓瑞が足を止めて塔と塔の間に目を凝らす。しばらくして黒羽の耳にも葉擦れのようなかさかさした音が届いた。
　黒羽は息を詰めて鯉口を切る。
　そうして奥の塔の影に白い蜥蜴の顔が覗いているのを見つけた。顔だけ見ても全長は大男ほどありそうだ。
　深紅の瞳がふたりを捕まえる。
「妖魔、なわけねえよな」
　あり得ないことだ。聖地には自浄作用があるので妖魔が発生することはない。
　だがそう言いながらも黒羽は確かに瘴気を感じ取って冥炎を構える。
「来ますよ」
　蜥蜴が塔の影に消えて、漓瑞が左手をあげて刻印から水をあふれさす。
　次の瞬間には一番すぐ側の塔の背後から飛び出てくる。
　紫色の舌が迫ってきて黒羽はそれを切り落とそうと刃を振り下ろすが目にも止まらぬ速さで舌を引っ込めて蜥蜴はまた姿を消す。
　かと思えば正反対の方向から舌が飛んできて黒羽は青い炎を纏わせた冥炎でそれを受け止める。
　妖魔の舌がかすめたと思われる場所は溶けている。
「一体だけではありません。黒羽さん、出来るだけ私の近くに」
　黒羽はうなずいて漓瑞の側によると水の天幕が周囲に張り巡らされた。
「場所が悪いな。いつまでこうしてても埒があかねえぞ」
　とにかく視界が悪い。その中で向こうもすばしっこく動き回っていて何匹いるのかもよく分からない。
「……これ、壊せたら楽なんだけどよ、さすがにまずいか？」
　一気に冥炎の炎で全てを押し流してしまえばすぐに片をつけられ

るが、その際周りの塔も破壊することになる。
「ここは一応森ですしね。加減はしていただかないと……」
確かに闇雲に炎を放つと大惨事になりかねない。
「厄介だな、どうする？」
「どうしましょうね。すでにこの幕を消し去ったらすぐにでも攻撃されそうな気がしますが……黒羽さん、合図をしたら前に向けて、出来るだけ塔の真ん中をめがけて加減して冥炎を放ってもらえますか。塔はこのさい非常事態ということで仕方ないですから藍李さんに事後処理は任せましょう」
任せる、というより押しつけるではなかろうかと考えつつ黒羽は冥炎に炎を纏わせる。以前より格段に力の制御は出来るようになっているのでたぶん、大丈夫だろう。
漓瑞が今です、と言うと前方の水の幕が消える。
青い炎の奔流がそこから塔の上方めがけて滝が逆方向へ流れるように向かっていくのと同時に幕はまた閉じる。そして塔を築き上げる石が熱に溶かされて変形し、一気に崩壊していく。
ざらついたか細い鳴き声のようなものがいくつかあがった。
「……よし、見晴らしはよくなったな」
あたりは瓦礫だらけだが、物陰はこれで少なくなっている。何匹か崩壊に巻き込まれて瓦礫に埋まってもがいているのが見えた。
そして漓瑞が水の幕を背後へと丸めた反物を広げるようにして伸ばす。
「残りは逃げたようですね」
かすかな物音を探りながら漓瑞が言って、黒羽は冥炎をしまう。
「あれ、妖魔だよな」
「ええ、そうですが、なにか普通のものとは違う気もしますね」
瘴気は感じるが、なにか違和感を覚えるのは漓瑞も同じようだった。
黒羽は瓦礫に挟まれて呻く蜥蜴に近づいて、とどめを刺す。そうすると普通の妖魔と同じように黒い霧となってそれは消えた。

「黒羽さん！」
急に切羽詰まった漓瑞の声が聞こえて黒羽は振り返る。それと同時に足下がぐらぐらと揺れ動いた。
何事かと思っていると瓦礫が一気に地中に引きずり込まれる。それと同時に黒羽の足下の地面も落下した。
「っと、なんだこれ。漓瑞！　大丈夫か！」
衝撃で尻餅をついた黒羽は砂塵に咳き込みながらも体を起こしながら姿の見えない漓瑞を呼ぶ。
「大丈夫です。周りの様子、分かりますか？」
言われて立ち上がった黒羽は首を巡らすと、直方体の石を重ねた壁が周囲に見えた。地下室か何かの回廊だろう。頭上には樹の根が張り巡らされていて隙間は床石ひとつ分かふたつ分はあるので全く何も見えないというわけではないが、曇天のせいで樹の根の影は濃く周囲に滲み出している。
「地下室みたいだけどそっちも同じか？」
「ええ。そちらに行く道はあるのですが瓦礫で埋まってしまっていて通れそうにないです。……塔を壊すのは短慮だったかもしれませんね」
漓瑞の自らの失策についたため息が聞こえてくる。
思ったより近いところにいるようだと安心しながら黒羽は壁に背をもたれて頭上を見上げる。魔族である漓瑞でも跳躍力に特化しているわけではないのでこれは飛び越えられないだろう。
「ま、これ予想しろって行っても無理だろうしな。崩れたっていうかなんか動いたってかんじだしよ」
床石ひとつひとつが意思を持っているかのように下に降りたのだ。実際足下に床石が割れたり崩れたりしたあとはない。
「……侵入者避け、でしょうか。どのみち派手に暴れるとなんらかの仕掛けが発動するようなので以後は気をつけないといけませんね。とにかくそっちに行くので黒羽さんはそこにいてください。登れそうな瓦礫を探します」

「分かった。またさっきのやつが出てくるかもしれねえから気をつけろよ」
「ええ。黒羽さんも」
そう言って彼の足音が遠ざかっていく。黒羽はいつでも抜けるよう冥炎の柄に手を置いたままその場で言われたとおりじっとしていた。
それから少し経った頃、奥の方で石を蹴飛ばす音がする。さっきの妖魔かと思い黒羽は息を詰めるが、そこに足音が混じってきて眉根を寄せた。
足音は少し離れたところで止まり、次に麻袋か何かをがさごそと探る音が聞こえる。
漓瑞ではない。そうなると足跡の主か。
向こうが近づいてこないならここで息を潜めていた方がいいとは思うが気になる。
道はそう複雑そうでもなさそうだし離れた場所でもないだろうと黒羽は音の方へ足音を忍ばせて近寄る。
そうすると壁の影から灯が零れているのが見えた。黒羽は背を壁にあて、そろりと向こう側を覗き込む。
そこには座り込み何か腕を動かしてる男の姿が見えた。側には光源と見られる硝子のような器に蝋燭が入ったものがある。
その灯と上から射すわずかな光に照らされる少し癖のある髪は蜜のような色をしている。まずこの国の人間ではないし、見知った者でもなさそうだ。
何よりもその背はあまりにも無防備すぎる。
「……お前、誰だ。ここで何してる？」
黒羽は念のため冥炎を抜いて男に近づく。
「え？　わあ、びっくりした。俺はグリフィス。記録してるんだよ」
肩をすくめてきょとんとした顔をしている男は思っていたより若かった。二十になるかそこらだろうその面立ちは人の目を強く惹きつけるような優美なものだ。カンラン石のような透明度の高い新緑

色の瞳は面立ちより幼い印象を受ける。
グリフィスという名前は妙に記憶に引っかかったが思い出せない。
彼が持っているものは紙の束と細長い墨のようなものに何かを巻き付けているものだということを確認して黒羽は冥炎を鞘に収めた。
「記録ってなんのだ？」
警戒を解かないまま黒羽はグリフィスの隣に立って手元の紙を覗き込む。そこには奇妙な文様が書き付けられていた。
「これ。ここで昔使われてた文字。ほら、ここに刻まれてるやつだよ」
グリフィスが壁を示すと確かにそこには同じ文様が刻まれていた。記録しているのは嘘ではないようだ。それにしても、と黒羽は男を見下ろす。
妙に反応が子供っぽい。そう、局にいる五歳児が自分の興味を示しているものに相手も関心を持ったときのようなときのようなかんじだ。
「これ文字なのか？」
グリフィスの隣であぐらをかいて黒羽は壁を見る。
薄明かりに映し出された中で並ぶ文様はやはり模様にしか見えない。そもそも監理局員は女神の恩恵によりひとつの言語さえ覚えればあとはどんな言語も読めるし、喋れるのでこれが読めないということは文字ではないと言うことではないだろうか。
「文字だよ。まだこっち来て一週間も経ってないから法則はまだちゃんとわかんないけど規則性や使われ方からして文字だってことに間違いないんだ！　こういうのを俺は古代文字って呼んでる。きっと女神様が眠る前の世界、旧世界の言語なんだ」
力強く力説するその様子はまさしく子供だった。
話している内容の突飛さはアデルに通じるものがある。というか符もなしにここに進入してこんなことをしているとなればアデルと何らかの関わりがあるのは確かだろう。
「お前をここに入れたのはアデルか？」

「そうだよ。友達だから特別。ってだけじゃないけど日蝕の正確な日付と時刻を割り出したお礼に入れてくれたんだ。君、監理局の人だからアデルのことも知ってるの？」
　黒羽の耳に揺れる局員章を見ながらグリフィスが首をかしげる。
「ああ。知ってる。友達ってわけじゃねえけどな。アデルとはいつ知り合った？」
「アデルと会ったのは確か八歳の時だから十年前だね。かくれんぼしてて変な入り口を見つけてそこで古代文字を見つけて他にもないか探してそこを探検してるときに迷子になったんだ。そのときに助けてくれたのがアデル。いわば命の恩人だよ。で、そこで意気投合していろいろ話して、それからは手紙でやりとりしてたんだけど一年前に急に遊びに来たんだ。その時俺より小さくなっててびっくりしたんだ。君は小さいアデルともう会った？」
　早口でまくし立てるグリフィスをちょっと待てと黒羽は制する。
　聞いたのは自分だがこうも一気に喋られると頭の中で整理しきれない。
「知り合ったいきさつは分かった。近いうちにアデルに会う予定はあるか？」
「一緒に日蝕見ようっていったんだけどさ、無理そうだって言ってた」
　そう言って寂しそうにグリフィスがうなだれて黒羽はついその背中を慰めるように叩いてしまっていた。
「ん、まあ。あ事情があるんだろ。いろいろな。でもお前が思ってるよりずっとアデルは危険だ。いまのうちに縁切った方がいいぞ」
「なんで？　アデルはすごい研究者だよ。それに、たったひとりの友達だもん。やだよ」
　言いながらグリフィスが膝を抱える。伏せた長い睫の下の瞳の影は彼の孤独の深さを如実に示している。
「悪い。会ったばっかのやつが言うことじゃなかったな。でも本当に危ないからな、気をつけるんだ。それに友達なら作ろうと思えば

いくらでも作れると思うぞ」
無意識のうちに黒羽の口調は子供を宥めるものへと変わっていた。
「じゃあ、君は？　俺の友達になってくれる？」
少しだけ顔を上げてグリフィスがくすみのない瞳でまっすぐにみつめてくる。そして黒羽がまあ別にそれはいいけどと答えると笑顔を浮かべた。
「やった、じゃあ俺の二人目の友達、だね。えっと、名前は？」
黒羽は名乗りながらなんか妙なことになったなと頭をかく。
とりあえずグリフィスには害意はなさそうだしただの図体の大きい子供のようだ。漓瑞が脱出路を見つけるまでは相手でもしてるかと思ってふと気づく。
「上にあがる道ってわかるよな」
「うん。なんか魔族らしい人がうろうろしててみつかったら恐いなと思って隠れた所に階段があったんだ。そういえばなんだかさっき揺れたけどなにかあったの？」
「よくわかんねえけど、床が落ちてここにいる。……ん？　お前が魔族見たのって床が落ちる前、か？」
問いかけるとグリフィスがうなずいた。てっきり漓瑞かと思ったがそうではなさそうだ。となるとまだ他に侵入者がいることになる。
ひとまず身体的特徴を聞いてみると左手に魔族特有の刻印がある、黒亀で浅黒い肌の見た目は中年ぐらいの中肉中背の男、ということだ。それに右肩になにか大きい傷跡のようなものが見えたらしい。
「……アデルは魔族についてなんか言ってたか？」
「たまに入り込んでるから気をつけてとは言われたけど、アデルも新しい体はあんまり長く動かせないし起きていられる時間も限られてるから目的とかまでは調べられてないんだってさ。ここ来てすぐにもふたりぐらい見たよ」
有益な情報がひとつと謎がひとつ。
黒羽は顎に手を当てて考える。たまに入り込む者がいるというのは聞いたがそれは半年前である。アデルが関わりないとなるとまる

で分からない。こういうのは漓瑞に任せるのが一番だろう。
そう思っていると足音が聞こえてきて黒羽は立ち上がる。
この音の小さい規則正しい歩き方はたぶん漓瑞だろうとは思うが念のために冥炎はいつでも抜けるようにしておく。
「なんだ、やっぱりお前か」
来たのは予想通りの漓瑞で黒羽は肩から力を抜いて片手をあげる。
「……黒羽さん、そちらの方は？」
「アデルの友達のグリフィスだ」
「黒羽とも友達、だよ！」
不機嫌そうな口調でグリフィスが口を挟んでああ、そうだな悪いと黒羽は返す。
「グリフィス……？　偽名ではなくそれは本名ですか？」
「友達に嘘の名前なんか教えたりしないよ。黒羽、なんか俺あいつ嫌い」
黒羽の指を引っ張ってグリフィスがじとっと漓瑞を見る。漓瑞はそれにわずかに眉を上げて一瞬だけ不快そうな表情をつくる。
「こら、初対面の人間に向かってそんなこと言うんじゃねえよ。漓瑞は悪い奴じゃないぞ」
澱んだ空気に頬をかきながら黒羽はグリフィスを嗜めた。
「残念ながら、そちらの方がグリフィス・ジルディアラルド・レイザスであるならあまり友好的にはなれませんが」
漓瑞の言っていることの意味を咀嚼するのに黒羽はしばらくかかった。
「……帝国の新しい皇帝、なのか？」
そしてたどりついた答えを口にするとグリフィスが世界の三分の一を手中に収める大帝国の主には到底見えない無邪気な笑顔でそうだよと答えたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8975y/

廃園の牢獄―女神の玉座２―

2012年1月6日23時48分発行